



TITLE:

認知言語学的観点に基づく意味変化の一考察

AUTHOR(S):

薦田, 奈美

CITATION:

薦田, 奈美. 認知言語学的観点に基づく意味変化の一考察. 言語科学論集
2009, 15: 79-101

ISSUE DATE:

2009-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/141350>

RIGHT:

認知言語学的観点に基づく意味変化の一考察

こもだ なみ
薦田 奈美

1. はじめに

本稿では、意味変化現象は2つの段階に分けて捉えるべきものであるとする。すなわち、新しい意味の発生と、その発生した意味の定着の段階である。このような背景から、個人の言語使用を通して新たな意味の変種が発生することが意味変化の第一段階であると定義する。特にこの意味変化の第一段階に注目し、認知言語学的観点から見て、新しい意味の発生は2つの認知的メカニズムから構成されたプロセスとして捉える事が可能になるのであり、そのメカニズムとは、メタファー化とメトニミー化である。これらは、人間の基本的な認知活動であり、話し手と聞き手の両方において、同時に機能し得るものである。本稿は、これらのメカニズムを使用したモデルを構築し、意味変化に対する新しい記述方法への足掛かりとして、認知言語学的な観点からの考察が有用であることを示すことを目的とする。このような記述方法の実践例として、特に移動に関わる動詞の変化についても採り上げる。

2. 文法化モデルから意味変化モデルへ

従来の研究において、メタファー・メトニミーという言語表現は、意味変化に大きく関わりを持つものとして捉えられてきた。意味変化の原因として、あるいは背景として、など扱い方に統一性はないものの、これらの表現が意味の変化に重要な役割を果たすものであることは、多くの研究において認められるところであろう。メタファーやメトニミーのような言語表現は、個人の言語使用の場における意図性が関係する。言い換えれば、意味変化の二段階過程でいうと、意味が新たに発生する前段階において、これらの言語表現を使用する人間の意識が深く関わっている、ということになる。このような観点から意味変化を捉えて記述しようという試みが、近年、認知言語学の分野で行われている。認知言語学では、メタファーやメトニミーを、単に非日常的な逸脱した修辭的表現として捉えるのではなく、人間の認知的な営みとして捉えている。比喻としてのメタファー・メトニミーではなく、更にその根本にある、人間の認知メカニズムが新たな意味の発生に関わっていると考えれば、これまで見えていなかった、意味変化の新たな側面が明らかになるだろう。

意味の変化が、実際の言語使用の場における新しい意味の発生と、慣習化による意味の定着という、二段階の過程を有する現象として定義すると、「どのように意味が発生するのか」ということと、「どのように意味が定着するのか」ということの2つの点から、意味変化現象を捉えることができる。特に、意味の発生の実際については、個人の言語使用の場に関わるために、歴史的資料から判断することが難しい。しかし、人間として共通に持っているはずの認知メカニズムが根本的に意味の発生に関わるとするならば、意味の変化が具体的にど

のような過程を有しているか、という点において、従来の研究では説明しきれなかった部分を明らかにすることが可能になるのではないだろうか。本節では、意味変化現象を記述する上で常に不可欠なものとされてきたメタファー・メトニミーに対し、従来とは異なった捉え方をする認知言語学において、意味変化現象がどのように記述されているかを概観する。その上で、特に意味の発生について、元来の意味と新しい意味とを比較するだけでは見えてこない、意味変化の過程というものをいかに記述し得るかを考える。

2.1. 文法化と意味変化

語の持つ意味が語彙的な意味から文法的な意味へと発展する、文法化という現象が、意味変化現象研究の範囲内において扱われるのは至極当然のことである。しかし、文法化に対する説明としては、語彙的カテゴリーから文法的カテゴリーへの誘導というのが最も一般的となっている。¹ これに対して Heine は、文法形式が時間と空間を通して現れ発展する方法であり、一方向性を持つプロセスとして、文法化を定義している。Heine et al. (1991) では、文法化が、認知的基盤と語用論的基盤を有する、連鎖状構造を成すものとして説明されている。具体的ではない、容易に理解できない意味内容を表現するために、より具体的に容易に理解できるような言語学的形式を使用することが、人間の言語的戦略として存在する。それゆえ、文法化は、符号化している文法的意味(target)のための特殊な文脈で、具体的意味(source)のための表現が使用されるという過程である、というのが彼の主張である。

(1) be going to

- a. John is going to town soon.
- b. John is going to work soon.
- c. John is going to get sick soon.

まず第一段階において、許容された表現、すなわち文法的に適正である表現として語が現れる。この時、語が現れる文脈が、文法化に適した文脈であれば、その語がより文法的な表現として機能することができるようになる動機づけがここで行われる。(1)のaで言えば、is going to という表現は、本来身体動作の意味を表しているが、soon という未来を表す副詞と共に現れることによって、未来性を暗示する表現となる可能性が存在し、文法化が起こる適切性を有している。次に、第二段階として、新たな使用パターンを取得し得るような文脈の中で、同様の表現が使用される。ここでは、本来の意味と新たに語が取得する意味での両方の解釈が可能になる。(1)bは、後ろに work が続くことによって、元来の身体動作としての「行く」という意味に目的が付加された表現として捉えることもでき、またその目的である work を強調して、「～するだろう」という未来時制マーカーとして be going to を解釈することもできるようになる。この時、身体動作の概念と、より抽象的な時間の概念とが共存し、重なり合った状態となっている。そして、本来の身体動作の意味が排除され、もっぱら文法的マーカーとして機能するようになる。(1)cは、動詞である get が文脈に現れる

ことによって、be going to が時制の表現としてしか使用できなくなり、文法化という一連のプロセスが完成する。

具体的な人間の経験を表現する言語学的形式が、より抽象的・文法的・機能的となる、文法化のプロセスにおいて、概念移動が行われるところに、認知的な基盤を有すると Heine は述べている。例えば、「背中」という意味を持つ back という語において、具体的な概念から、「～の後ろに」という意味を持つ in back of という表現のように、より抽象的な前置詞や副詞が生み出されるといったようなことである。身体部位という具体的な概念から、より抽象的な空間の概念領域へ転移するというのは、そのほか、go to や come to といった表現についても言えることである。このように、ある概念領域を、他の概念領域で捉えなおす、というのは、メタファー表現に見られるものと同じである。Lakoff and Johnson (1980)によれば、メタファーの本質は、単に言葉の問題ではなく、ある概念領域を別の概念領域で捉えなおすという認知の営みにある。これがメタファーという表現形式を可能にしているのであり、この認知の営みこそが、具体的な概念からより抽象的な文法的意味を持つようになる文法化の認知的側面であると捉えられる。その一方で、文法化が起こるのに適切な文脈を要求し、文法化された意味で使用される文脈を拡大し、より一般的な文脈でも使用されるようになるという、文脈によって誘導的に引き起こされる再解釈は、文法化の過程における語用論的な側面を示している。文脈から推測して行われる解釈や、会話における含意と関係して、本来の具体的な意味からより文法的な意味へ、両方の意味で解釈される中間的な段階をはさんでゆるやかに転移していく、それが文法化の持つ語用論的な基盤である、と Heine は説明している。これらの2つの側面を視覚的にモデル化したものが図1である。

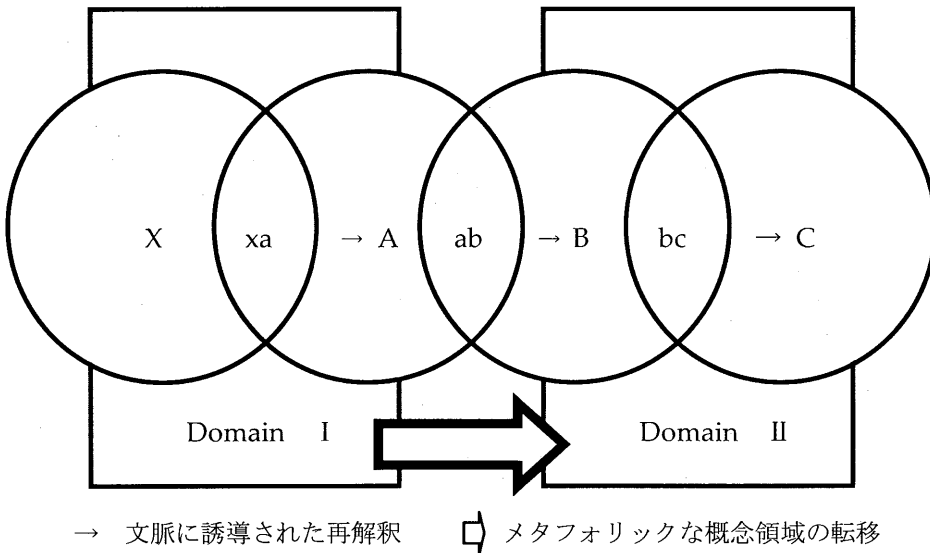


図1. metonymic-metaphorical model (Heine 1993)

このモデルの中で、大文字は実際に発現している意味を、小文字は表面的に現れているのではない意味を表している。 $X \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C$ という単純な意味変化ではなく、それぞれに共通する部分があって、重なり合っていることで、この変化は完成する。be going to の例でいえば、go という動作を表す動詞において、表面的に現れる意味は「行く」であるが、その動作には暗示的に時間の経過が示されている。その点で、「～だろう」という時間的な概念をもつ意味と重なり合うことができ、その両方の意味で解釈できる段階を踏まえたのち、完全に文法化された表現として扱われるようになる。多義的に意味がオーバーラップした状態というのは、この中間的段階をいわば共時的に捉えたものであり、Heine はこの連鎖構造が、共時的なだけでなく、通時的なものでもあるとしている。(1)の a から c のような文は、b が両方の解釈が可能である曖昧な状態というだけではなく、a から c まで、文脈の拡大を通じ、時間軸に沿ってゆるやかに変移していくものである。そして、身体動作の概念から時間の概念への転移は文法化のメタファー的性質といえるものであり、また、文脈と密接に関連してそこから導き出されるように解釈を行っていくということは、文法化のメトニミー的性質とみなされる。後者が具体的にメトニミー的であると言えるかどうかには疑問が残るが、ここで論じられるのは、語を使用し又解釈するという場面で、実際に現れている言語表現から、経験的・推論的に、より文法的な意味を付加するという働きが、文法化の根底に存在している、ということである。言語学的形式において表現されている意味そのものを概念で捉えることも、文脈に誘導されるのも、経験則に基づいた人間の意識の問題であり、文法的な意味は言語表現そのものだけから与えられているのではなく、このような働きに基づいて人間が文法的な意味を言語表現に与えていると解し得る。文法化を意味変化の特殊形として考えるならば、意味変化を論じる上でも、同様のことが述べられる。すなわち、語の意味が変化するのではなく、言語活動の根底にある人間の認知活動が、新たな意味を語に付加している、と行うことができる。

2.2. 意味の発生と認知メカニズム

Heine が示した文法化のメタファー的性質とメトニミー的性質は、文法化以外の意味変化現象においても見られるものである。文法化を意味変化に置き換えて考えると、実際の言語使用に伴った人間の認知的活動が、語に新たな意味を付加する役割を担っていて、それによって発生した新しい意味は、慣習化されることによって、一般的に語の新しい意味として認められる、この一連の過程を経たものが意味変化現象となる。

本稿では、Traugott and Dasher (2002) の *metaphorization, metonymization* にならい、動的なメカニズムとしてのメタファー・メトニミーを、メタファー化・メトニミー化と呼ぶことにする。メタファーやメトニミーのような比喩表現を実際に支えている、人間の認知活動のレベルでの働きを、新たな意味を発生させる意味変化のメカニズムとして捉え、このように呼ぶものである。具体的に、メタファー化とメトニミー化がいかなるものであるか、Heine が文法化に対して行った説明との共通点・相違点を踏まえつつ、彼らの記述を見してみる。

まず、metaphorization については、「ある概念的構造 B の要素において、概念的構造 A のある要素を概念化する」ことであり、それらは「domain 間において機能する」とされる。domain とは、概念領域・概念構造のことであり、その説明は様々であるが、² Traugott and Dasher は、概念構造と同義として捉えている。時間の while 「～の間に」から譲歩の while 「～なのに」への変化、grasp の「つかむ」から「理解する」への変化の例などは、異なった概念領域の飛躍、あるいは投影として理解することができる。この考え方は、ある概念領域を他の概念領域で捉え直すという人間の認知的営みが、文法化の認知的側面であるとした、Heine の文法化のメタファー的性質に対する説明と、根本的に同じである。ここで、while の文法化の例と grasp の意味変化の例が両方挙げられていることを見ても、文法化以外の意味変化の例について、文法化と同様に考えることが可能であることを示しているといえよう。そもそも、Traugott and Dasher (2002)において基盤となっているのは、言語使用者が言語を伴って活動する際、言語使用者が描く抽象的体系は話し手ごとに大きく異なっていて、習得の不連続が存在しているため、変化の時間を超越した連続性は見かけだけのものである、ということである。意味を発展させる最小の原動力は、話し手の共時的なプロセスに基づくものであり、話し手が日常から逸脱した意味において語を使用し、聞き手が推測に基づいて解釈を行うところで、意味のずれが起こり、それが言語共同体に受容され、繰り返されることで浸透していくことが、意味変化の本質である。個人の言語使用のレベルにおいて、新たな意味が発生し、その発生した意味が慣習化され、定着するという意味変化の二段階の過程に照らせば、この考え方には納得がいく。話し手が類似性を認識することによって、一見すると関係がないように見える概念領域同士 (source と target) を結び付け、新しい概念領域(target)で本来の概念領域(source)を捉え直すという認知的営みが、意味の発生のメカニズムとして機能する、その働きがメタファー化である。

意味の発生のメカニズムとして扱われる概念領域の転移³に関して、本稿ではさらに概念領域の選択について、次のように考える。前節で述べたように、個別の言語使用に際して、意味を捉える上での概念領域の選択は、一定の条件下である程度の自由性があると言わざるを得ない。具体的事物、例えば、身体名詞で言うなら、指という指示対象を、手の一部と捉えるか、腕の一部と捉えるか、身体の一部と捉えるかは言うなれば自由である。しかしながら、身体という一つ概念領域から逸脱するものではなく、「その指示対象をそれと同定できる程度の制限」がなければならない。その制限を超えない範囲において対象が理解される限り、その語が示す指示対象が通念上存在する概念領域において理解されていると見做される。従って、概念領域が転移するということは、その語が示す事物が一般的に解されるであろう概念領域の枠内を超えて、その事物そのものであるとは同定できないような概念領域、例えば「手」という語が、身体的なそれではなく、「左手」のような方向を示す表現として使用される場合には、すでにその「手」が身体部分の「手」そのものと同定することはできず、その特徴が共通点となっていることのみによって、「手」という言語表現がつなぎとめられているにすぎない。このように、概念領域の選択は、一定の制限下において自由に行われると考えられる。

しかし、その選択にいくら自由性があるとはいえ、概念領域の転移を、意味の発生のメカニズムとして扱う以上、その選択になんらかの基準を設けておく必要がある。概念領域の設定自体に一定の自由性があるとした上で、いわば指標となるような選択基準として考えられるのは、例えば動詞の語彙分解に見られる概念的意味による分類および動詞のアスペクト性による分類、あるいは語場による分類である。まず、状態・状態変化・過程・活動／動作のようなアスペクトによる分類を、動詞の基本分類として考え、それと並行して、同じような概念的意味によって分類することも可能である。例えば同じ状態を示す動詞であっても、その意味役割の与え方によって、*lieben*「愛する」のような動詞は心理、*liegen*「横たわっている」のような動詞は場所、というように分解される。どのような枠組みで理解するか、という概念領域の本質に従って動詞の意味を捉えるならば、時間軸に沿った事象の分類としてのアスペクト分類と、それに加えて、意味役割を元にしたこのような意味クラスによる分類は、概念領域の選択基準として、一つの指標になり得るものであると言えよう。また、意味内容的に緊密に隣接している語の集まりとして捉えられる語場、例えば、移動・打撃・接触等、ある一定の意味内容について同じであると理解される語のまとまりは、まさに語の示す意味を理解する枠組みとしての概念領域に他ならない。

ここで注意しなければならないのは、概念領域の選択の指標をいくら立てたとしても、一つの基準に収まりきるものではない、ということである。単なる語レベルの理解としてではなく、意味の発生のメカニズムとしての一定の概念領域における語の理解という限り、どの基準に基づいた概念領域においてその語を理解するかということは、話し手及び聞き手の判断に任されている。ただし、その基準は、完全に自由に選択されるのではなく、やはりアスペクトや語場のように、話し手と聞き手の間で既に共有している知識の中で判断可能であるものから選択されるものであらうと考えられる。

このように、概念領域の転移による意味の発生のメカニズムとしてメタファー化が説明される一方で、*metonymization* に関しては、Heine の文法化における説明よりも、具体的に記述されている。従来、メトニミーについては、意味変化を記述する上で、メタファーほど重要なものではないとされてきたが、概念的対象としてメトニミーを理解する、すなわち *metonymization* として扱うことによって、言語と認知のより基礎的な部分を担っていると仮定し得る、と彼らは述べている。⁴ 聞き手による主観的な解釈、すなわち、特殊な文脈において、なんらかの関連性から推測が導き出されることが、メトニミーの「部分－全体」のような、一方向的な含意によって可能になることと同じであり、それゆえ、文脈の中で話し手の修辭的戦略と同時に行われる推論は、変化のプロセスにおけるメトニミックなメカニズムである。Heine が示した、文法化での文脈に誘導される解釈の本質は、ここにある。

(2) während

a. Während er vor dem Fernsehen sitzt, trinkt er Kaffee.

「彼はテレビの前に座って、コーヒーを飲んでいる」

b. Während sie um Hilfe bittet, bleibt er vor dem Fernsehen sitzen.

i. 「彼女が彼に手伝いを頼んでいる時に、彼はずっとテレビの前に座ったままである」

ii. 「彼女が彼に手伝いを頼んでいるのに、彼はずっとテレビの前に座ったままである」

c. Während sie gestern noch krank war, kann sie heute schon wieder lachen.

「彼女は昨日病気だったにもかかわらず、今日はもう笑うことができる」

(Heine 2003a: 587)

語が現れる環境、すなわち文脈が新しい意味での使用を促進させる働きは、メトニミー的な性質を持っているとされるのは、(2)の例に対して次のように説明できるからである。aのような反意の意味で捉えることが可能な文において während が使用されることで、主節と従属節の間に反意の意味を持たせることができるようになる。そしてbのように、どちらでも解釈できるが、反意での解釈のほうが、より自然であるとみなされるような文の中に während が使用されることで、より反意での解釈が容易になる。そして、cのように、heute と gestern という、同時にはありえない副詞が取り入れられた文で während が使用されることで、より一般的な文脈においても、während が反意の意味で使用されることができるようになる。このように、文脈によって適切な解釈へと導かれる働きは、「この文脈ならこの解釈が妥当である」という一種の推測によって、新たな意味での使用を促進していく。語が使用される文脈と、その解釈との間には、因果関係が存在し、それを推測によって理解する働きは、包含関係や因果関係に基づく比喻表現のメトニミーを理解するのと同種の働きであり、それゆえメトニミー的とされるのである。ここでいう働きが、metonymization である。Traugott and Dasher は、metonymization を個人の言語使用の場面における、話し手の修辭的戦略に対しての聞き手の状況判断に基づく推測として、Heine のいう文脈を状況に広げて捉えている。この具体的な例が、Nerlich and Clarke (1992b)の中で挙げられている。

(3) She is fair. / He is fair.

(4) Get your Gucci out of here.

(5) I have got the paper.

(Nerlich and Clarke 1992b: 205)

例えば、(3)の場合、一般に主語が she の方の文では、聞き手は「彼女は美しい」ことを推論し、主語が he の方の文では、「彼は公平である」など、より道徳的な推論を誘引しやすい。このような働きが、「美しい」という意味から「正直な・公平な」といった意味へ変化するプロセスに関わっている、と説明される。これに加えて、(4)のような文を、裕福な男性の愛人が聞けば、彼が彼女にして欲しいと思っていることを素早く推論し得る。また、(5)のような文が、保育園で発話されれば画用紙を示し、朝食時の食卓で発話されれば新聞を示す。これらは、単に指示的・機能的推論として説明される現象であると同時に、認知活動のレベルで捉えれば、文脈を状況に置き換えることで、意味の発生のメトニミー的性質を持つ部分として考えられるのである。状況に応じた推測によって、新たな意味での解釈が促されるという働きは、メタファー化同様、個人レベルで行われるもので、聞き手が

発話状況から適切な解釈を推測し、それが新たな意味の発生のメカニズムとして機能することが、メトニミー化である。

以上のことから、あらためて本稿での立場を述べておくと、意味変化のプロセスにおいて、人間の認知的営みである、概念領域を捉えなおすという働きと、状況に応じて適切な解釈を行うという働きが、それぞれ意味の発生に関与しており、これらの働きを、意味の発生のメカニズムとして、特にメタファー化・メトニミー化と呼ぶ。これらは、あくまでも認知活動を指すものであり、比喩表現として一般に扱われているメタファー・メトニミーとは明確に区別されるべきものである。

2.3. 元来の意味と新しい意味の関係性

メタファー化・メトニミー化に加えて、元来の意味と新しい意味の関係を捉えようとする上で、手掛かりとなるのが焦点化の働きである。元来の意味と新しい意味を結び付ける共通点として考えられるのは、メタファーとメトニミーを結び付ける類似性及び隣接性と同種のものが存在するという点である。類似性と隣接性を次のように考える。先ほど、いくつかの例で説明したとおり、メタファー化について言えば、元の意味をどのような要素に基づいて概念化し、新たな意味を生み出しているか、その「要素」の捉え方が、ここでの類似性の本質である。メトニミー化については、元来の意味から新しい意味を推測して生み出すのであるから、その語が使用された文脈や状況から容易に推測し得ることが、隣接性の本質である。メタファー化の類似性とは異なり、メトニミー化の隣接性は、新しい意味が導き出される際に、話し手と聞き手の両者にとって、説明が不要であるほど明らかなもので、理解が容易である、ということにその基盤がある。この意味で、メタファー化において、概念領域を結び付ける類似性は潜在的なものであるのに対し、メトニミー化の隣接性は、明示的なものとして捉え得るのである。

(6) fertig⁵ 元来の意味：「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」

→ [上位概念転移] 「用意のできた」 *fertig+zu の形で

Ich bin fertig zu jedweder Antwort.

「私はどんな返事にも動じない（心の準備ができています）」

→ [下位概念転移] 「用意ができた（今日 Gehen に関わることのみ）」

Wenn du fertig bist, können wir gehen. 「君が用意できているのなら出発しよう」

→ [転用・概念転移無] 「用事が終わる・終わりになる」

Bist du bald fertig? 「もうすぐ終わりますか？」

Sie ist fertig mit ihrem frühstück. 「彼女は朝食を済ませている」

(7) Kopf 身体部位としての意味：頭

→ [転用・概念転移有] 「あるものの部分」

Kopf eines Bergs 「山頂」

Kopf und Schwanz 「あるものの両端」

(6)では、乗り物を用意するという動作と、用意ができた状態について、抽象的と具体的という、概念レベルの差が存在する。ここで、なんらかの用意ができた状態という一般的な概念には、ある目的のための動作を行うという、「動作の性質」が、概念化するための「要素」として存在する。この「動作の性質」について、旅行という一つの目的のために必要な乗り物を用意するという動作と共通点ができあがる。すなわち、「動作の性質」という「要素」について、元来の意味と新しい意味が共通しているので、この2つの具体的な動作は潜在的に類似していると思われることになる。このことによって、乗り物を用意するという動作の概念化が可能になり、より一般的な領域へと転移する、という説明が考えられる。これに対して、(7)の山頂の例では、山全体に対してその先端部分であるという「空間的な関係性」が「要素」である。この対象物全体に対する「空間的な関係性」という「要素」は、人全体に対する頭という「部分と全体の関係性」と共通点を有し、身体的な領域が概念化されると説明され得る。「どのような要素に着目しているか」という働き、すなわち認知活動としての焦点化が、意味の発生にも関与していると考えられる。

2.4. 意味の発生の基本モデル

これまでに採り上げた幾つかの概念をもとに、辞書記述の分析から、意味の発生の基盤モデルを構築する。まず、メタファー化・メトニミー化および焦点化から、辞書における意味記述を考察すると、次のような説明が可能である。

(8) fertig

元来の意味：「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」

i. 「用意のできた」 … 19Jh.中頃まで *fertig+ zu-*の形で「～の用意」

Ich bin **fertig zu** jedweder Antwort.

「私はどんな返事にも動じない（心の準備ができています）」

→今日、Gehen（旅行、出発など）に関わることにのみ使用

Wenn du **fertig** bist, können wir gehen. 「君が用意できているのなら出発しよう」

・16世紀以降、元来の意味から発展 「簡単に動かせる・物事の実行が早い」

strenger und **fertiger** Justiz 「厳格かつ迅速な司法」(Paul: 327)

ii. 「用事が終わる・完了する（対象：人）、終わりになる（対象：物）」

Sie ist **fertig** mit ihrem frühstück. 「彼女は朝食を済ませている」(Paul: 328)

・転用的使用として

Er ist **fertig**. 「死んでいる」「酔っ払った」「破産した」「疲れきった」

(8)は *fertig* の変化の例である。元来の意味「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」という意味から、iiの「用意ができた」という意味への変化について考える。先ほど述べたように、2つの意味の共通点として、iの「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」ということと、「用意ができた」ことについて、後者の方が一般的な動作に使用されるため、この変化は意味の一般化と呼ばれるものと考えることができる。この元来の意味とiの意味とは、

いずれも「動作」という基本的な概念構造の中に存在するものであり、元来の意味「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」という意味の方が、移動に関わることにのみに限定されているため、iの「用意ができた」という意味よりも具体的な概念領域に存在すると考えることができる。この場合、「動作」という概念は変化しないため、メタファー化に見られたようなかけ離れた概念領域への転移とはみなされず、同一の概念構造内の変化として、メトニミー化であることが考えられる。語の使用された状況や場からの推測によって、より一般的な動作としての使用が可能になったとすれば、次のような説明が考えられ得る。例えば宿のような特殊な状況下では、元来の意味である「乗り物を用意する」という意味での語の使用が頻繁であろう。その特殊な状況が日常となっている場合、それ以外の状況では、別の意味で解釈を行うことができる。つまり、語の使用者、すなわちこの例でいうところの宿の従業員にとって、一般的ではない状況、すなわち宿以外の状況から、別の意味が導かれたということになる。宿の中という状況で、「走行・旅行ができる、乗り物を用意する」という意味で使用する使用者にとって日常的であった場合、宿の中以外の状況でその語を使用することは、その使用者にとって非日常的な意味でその語を使用することを容易にする。このように特定の使用者にとって、非日常的な状況での使用が、一般の使用者から見れば一般的な状況であった場合、元来その語が有していた意味よりも一般的な意味を導き出すことは、十分に考えられ得る。それゆえ、この変化は誘因的推測から起こったメトニミー化であり、iの例文にあるような、zuをつけて様々な意味に対応した表現として現れたと考えることができると言えよう。また、「用意」という具体的な動作にのみ関して言うならば、「用意をする」という「動作の様態」に焦点が当たっていた所から、「用意のできた」という「動作の結果」に焦点が当たるようになった、と考えられる。すなわち、「乗り物」や「旅行」といった要素が、メトニミー化によって排除され、それに加えて焦点の転移が機能することで、この変化が達成されたという説明が可能になる。

次に、iの「用意のできた」という意味から、iiの「用事が終わる」という意味について見てみることにする。iの「用意のできた」という意味において、同じく「動作の結果」に焦点が当たっていたとすれば、iiの「用事が終わる」という、状態変化の概念領域に属する意味において、その過程の完了、すなわち「状態変化の結果」に焦点が当てられ、焦点の共通によって、動作と状態変化という概念領域が結び付けられた、メタファー化による変化として捉え得る。しかし、ここで問題になるのは、iの「用意のできた」という意味から、iiの「用事が終わる」という意味を生み出す過程においても、元来の意味からiの意味への変化と同様に、「動作の結果」に焦点が当てられたままであったかどうか、ということである。このことが問題になるのは、意味が幾つかの段階を経て発展していく際に、焦点の置き方が維持されているか否か、という、概念領域には左右されないであろうレベルの問題である。すなわち、1の意味から2の意味へ、2の意味から3の意味へというような、連鎖的な意味の発展を考える時にのみ問題になることである。個別の言語使用のレベルから新たな意味の発生を考えるという本稿の主旨から言えば、この問題が現れるのは至極当然のことで、個別の意味の発生とその定着という、最も根本的な部分に関わってくることである。個別の言語使用レベルでの意味の発生は常時起こり得ることで、この新たに発生した意味の変種が意味

として定着を経ると同時に、定着していない、いわば中間段階の意味も発生していたと予測され得る。1の意味から2の意味だけが単一的に出現したわけではなく、他の派生的意味が出現していた可能性はあり、ただそのいくつかのうちの 하나가、一般に受け入れられ、定着しただけのことである。幾つかの意味発生の中のひとつとして捉えるなら、別の意味発生について、全く異なった要素に関しての焦点の転移あるいは共通が見られたケース、あるいは全く別の概念領域への転移が見られたケースも存在し得る。だとすれば、それらの別の意味との関係性の中で、焦点の置き方が維持されていたとしても、理論上問題はないのではなかろうか。例えば、*fertig* の ii の例において、転用的使用に見られる、「死んでいる」「酔っぱらった」「疲れ切った」「破産した」などの意味の全てにおいて、「結果」という焦点が関わっていることは容易に推測される。これらの転用が現れるのは、すべてその元になる「用事が終わる」の意味から、その「結果」という焦点を引き継いでいることによるものである。この後、新たな意味が現れるとしても、おそらくはこれらの周辺的使用の存在から、「結果」という焦点を認識することが予測され、新たな意味を導く上で、その焦点の置き方は維持され続けると考えることができよう。

(9) *frech*

元来の意味：「食欲な、渴望した」(got. *-friks; faihufriks* 「お金に食欲な」)

- i. 「争いに食欲な」=「勇気のある、大胆な」(Mhd.)

alle meine kühnsten träume sind in erfüllung gegangen, meine **frechsten** wünsche stehn jetzt vor mir.

「私の思い切った夢は実現し、大胆な希望が今や目の前にある」(Paul: 349)

- ii. 「ずうずうしい、厚かましい」

falscher Zeuge der **frech** lügen redet 「偽りの証人が厚かましい嘘をつく」(Paul: 349)

また、(9)の *frech* の例で、iの意味から iiの意味への変化は特に意味の下落と呼ばれている現象である。この例では、「性質」という概念領域は変化しない。実際の使用を考えてみると、「あつかましい」ことは、「大胆な」ことよりも、より否定的なイメージをもつ性質であり、対象を好意的に捉えているか、否定的に捉えているかによって、この語をどちらの意味で解釈するかが決まる。つまり、対象そのものが否定的なイメージを持っているような場面において語が使用されたことから、それ以前にはなかった、より否定的な意味が導き出されたと考えられる。iiの意味の例文を見てみると、主語に偽りの証人という語が来ており、対象がより否定的なイメージを持っている場面であることを示していると思われる。ゆえにこの例は、メトニミー化として説明されよう。ただし、焦点の転移という点に関しては、この例には当てはまらない。「人の性質」という点において共通しているのみで、ここに焦点が働いているとは考えにくい。とすれば、先ほどの *fertig* の例と比べると、メトニミー化において、焦点の転移が働かないケースも存在し得る、ということが分かる。すなわち、メタファー化と焦点の共通とは異なり、メトニミー化と焦点の転移について、共起することはあっても、かならずしも起こることではないと考えられる。やはり、メトニミー化はあくまでも外的な変

化のメカニズムであって、メタファー化と同レベルで取り扱うことは困難であろう。概念領域あるいは概念構造を基準に考えれば、焦点が共通していることによって、異なった概念領域あるいは概念構造が結び付けられ、メタファー化が起こる。それに対し、同一の概念領域あるいは概念構造内において新たな意味を導き出そうとする場合に、使用される場や状況のような外的な力としてメトニミー化がその意味の発生を助ける。場や状況があることによって誘因的に導き出されるという意味の発生は、メタファー化の類似性を見出す意味の発生に比べて、いわば受動的なものであり、それゆえに、焦点の共通によって支えられたメタファー化よりも、メトニミー化の方が意味の発生の動力としての働きは弱いのであろう。そこで、メタファー化と同レベルの動力として、焦点の転移が同時に働いてしまうと考えられる。メトニミー化のみで意味の発生が起こることもあるが、多くの場合には、焦点の転移と共に起すのは、それゆえのことではないだろうか。

このような例の幾つかの分析から、意味の発生に関して、次のようなことが考えられる。まず、元来の意味と新しい意味とを結び付けるという点で、それらの間には必ず共通点が存在する。メタファー化・メトニミー化という限り、その共通点は類似性・隣接性として捉え得るものである。まず移動様態動詞について、メタファー化においては、焦点を当てている要素が共通していることによって、異なった概念領域どうしの間に類似性が感じられ、2つの概念領域が結び付けられる、という説明が可能である。一方、メトニミー化においては、同一の概念領域あるいは概念構造内において、焦点が転移することと関わりがあるとは認められるものの、すべての例について説明が可能なものではなく、さらに形容詞の例でも、メトニミー化と共に起す場合としない場合があることが明らかになった。メトニミー化の本質としては、語が使用された状況や場から、妥当であると思われる解釈が誘導的に行われることによって、新たな意味が導き出されるものであるために、メタファー化と同レベルで捉えることは困難であると考えられる。それと同時に、メトニミー化は、その動力源が、状況や場からの推測という、いわば外部からの受動的な働きかけによるものであるため、それのみでの変化というのが起こりにくいと考え得る。その一方で、メタファー化の動力としての焦点の働きは、ある要素に注目することで全く異なった概念領域を結び付けるといふ、いわば能動的なものである。この根本的な認知活動としての焦点の働きが、メタファー化だけではなく、メトニミー化にも、その受動的な動力を支えるものとして、焦点の転移という形で影響を及ぼしていると結論する。メトニミー化において、焦点の転移は、補佐的な動力として働くものと考えられるのである。それゆえ、メトニミー化の多くの例について、焦点の転移との共起が多く認められるが、焦点の転移が現れていないような例も存在するのであろう。

これらの点を踏まえて、図2にメタファー化とメトニミー化に基づく意味の発生モデルを示す。

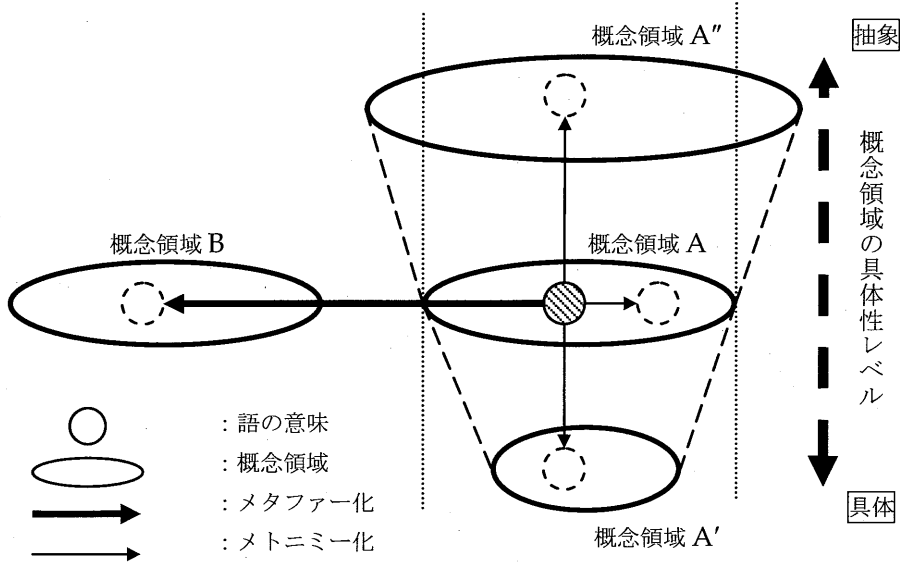


図2. メタファー化とメトニミー化に基づく意味の発生モデル

このように、まずメタファー化とメトニミー化によって、意味の発生を示すことができ、それらの動力源として、焦点の共通と焦点の転移が関わっていることは上に述べた通りである。しかし、焦点の働きが、移動様態動詞に関して、特にメトニミー化の補佐の動力としてだけではなく、特別な働きを有する可能性がある。また、このモデルに基づいて考察を進める上でも、ある特定の概念領域に限定して考察を行うことによって、なんらかの意味の発生の傾向が見られる可能性も考えられる。従って、次節では、考察対象を移動様態動詞の意味変化例に限定し、このモデルから説明し得る、移動様態動詞の意味変化の傾向を中心に考えることを目的とする。

3. 意味発生モデルによる移動様態動詞の考察

移動様態動詞の変化において、最も重点を置くべきは、その「移動」の概念である。ここで言う「移動」の概念には、「主体がその存在する場所を変える」ことだけではなく、「対象物の存在する場所を変える」ことまでも含まれる。すなわち、「移動」の概念は、主体あるいは対象物の位置が、自発的に、あるいは他者からの力を受けて変化すること」を指す。このように「移動」の概念を定義することによって、移動の意味が全くなかった語に移動の意味が現れるような例や、逆に移動の意味がなくなってしまうような例、自動詞と他動詞の変換などについても、空間認識というより原初的な認知活動のレベルから捉えることができる。これに対し、「活動」の概念は、「主体が何らかの動作を行うこと」を指す。この「活動」の概念は主体が行う全ての動作を含む、最も抽象的なものとして捉えられるものである。「移動」の概念が語の意味に現れる、あるいはなくなるという移動様態動詞の変化において、変化の過程に存在する他の意味が示している「活動」と、どのような関係にあるのか、とい

うことを明らかにする。基本モデルを通して移動様態動詞の変化を考察し、加えて「活動」と「移動」を軸とした概念領域間の関係性を考慮に入れることによって、移動様態動詞の変化のプロセスを説明すると共に、基本モデルからの意味変化の実践的記述の一例として示すものである。

3.1. 移動の概念から活動の概念への変化

まず、移動という同一の概念領域、あるいは概念構造内での変化であると考えられる例で、いくつか見られるものに、馬の移動あるいは馬による移動を示す意味から、一般的な移動を示す意味への変化がある。

(10) *trotten* 「(馬が) 速足で歩く」

19 世紀以降 「ゆっくり、のろのろと歩いて行く」

(11) *stapfen* *mhd.* 「馬のゆっくりした歩き方」を示す

18 世紀後半、初めて人に対しての使用「ゆっくり、ゆうゆうと歩く」⁶

以降、人の移動としての意味で使用される

これらの例に関してまず言えることは、いずれの例に現れたどの意味も、移動という同一の概念において、その主体が「馬」から「人」へと変化していることについて共通している、ということである。主体の変化について、特に馬の歩き方を示す動詞が人の移動を示す意味となる所以は、やはり馬が移動手段として意識されているということにある。このような馬と人の密接な関わりから、主体となり得る他の生物の移動よりも、優先的に馬の移動に関する語が人の移動を示すようになるのは、ごく自然なことである。さらに、焦点の働きに関して言えば、移動の主体としての単独の「馬」から、その馬に騎乗している「人」へと焦点が転移することで、「人の移動」としての意味を持つことが考えられる。あるいは、その前段階として、馬に騎乗している人も含め、馬を移動の主体の一部として捉え、そこから移動物全体へと焦点が転移することによって、「馬の移動」だけではない、より一般的な「移動」として捉えるという一般化の過程を踏まえていることも考えられる。このように、「馬の移動」と「人の移動」の意味の間に、一般化の段階を経てから、「人の移動」にのみ使用されるようになった事例がいくつか存在することは、Paul の記述にある通りである。⁷ これらの例の他、*galoppieren* 「疾駆する」、*traben* 「駆け足で行く」なども、同様に「馬の移動」を意味していたところから、「人の移動」を示すようになった例である。

(12) *rennen* 元来の意味：「移動させる、追いやる」

i. 「走る、大急ぎで駆ける」

laufen und rennen den ganzen Tag (Kramer⁸; Paul: 795) 「一日中、走りになる」

Mit dem Kopfe wider die Wand rennen (Adelung⁹; Paul: 795)

「先頭で壁に向かって走る」

→転用「ひどい状況になる」

in sein Verderben rennen (Kramer¹⁰; Paul: 795) 「墮落する、破滅する」

ii. 「誰かを何かで傷つける」¹¹

...ihm...den Degen durch den Leib zu rennen... (Schiller, Wallensteins Tod¹²; Paul: 795)

「その剣を彼の体に突き刺すという事を…」

同様に、移動の主体について焦点が働いたと考えられる例に、rennen がある。まず、元来の意味「移動させる、追いやる」から i の「走る、大急ぎで駆ける」という意味では、「移動」の概念において共通している。上述の「馬の移動」から「人の移動」の変化の例に見られたものとは異なり、この例では、元来の意味の「移動させる」対象物と、i の意味の「走る」、すなわち移動する主体について、焦点の転移が起こっている。「移動させる、追いやる」という動作には、その対象物が移動することに伴い、それを移動させる主体が必ず共起する。対象物に伴った主体の移動について、対象物の移動と主体の移動が緊密に関係していることから、同じく移動という概念において、対象物から主体へと焦点が移動することが可能になる。ゆえに、「移動させる」という意味から「走る」という意味への変化が可能になると考えられる。ただし、ここで問題になるのは、その速さの概念である。元来の意味において、「移動させる、追いやる」という、単に対象物の移動を示していたものが、i の意味で「走る、大急ぎで駆ける」というように、「急いで」という様態をも含めて示すようになった理由が、焦点の転移だけでは説明しきれない。このことは、(10)の trotten の例において、「速足で歩く」から「ゆっくり歩いて行く」という、速度の変化にも当てはまる問題である。これらはいずれも、メトニミー化の外的な働きによるものであると仮定すると、容易に説明ができる。(12)の rennen の場合は、元来の意味「追いやる」という動作について、「追い立てる」こと＝「その対象が速足で逃げる」ことという連想が成立し、「追いやる」という動作に、その対象物の速さが概念的に共起し得る。ゆえに、対象物から主体への焦点の転移とともに、その速さが付加され、「急いで」という様態が加わった意味を示すようになったものであると説明できる。また、(10)の trotten の場合には、通念上「馬が足の速い動物である」と理解されるということ、そして galoppieren のような、馬のさらに速い移動を示す語が存在することから考えれば、trotten という語が示す「速足で」という移動の様態が、「速い」移動ではなく「ゆっくりした」移動であると捉えられ得る。それゆえ、trotten が元来「速足で歩く」という意味を有していたにも関わらず、「人の移動」を示す段階で、「ゆっくり移動する」という意味を示すようになったと考えられる。移動様態動詞としての性質から考えれば、一般に焦点が当てられるのはその「様態」であり、そこから焦点が転移する、あるいはその様態が共通して別の概念領域の意味を示すようになるという変化が自然であるように思われる。しかし、意味の発生において機能する焦点の働きは、その焦点が置かれる要素に概念化させて捉えるという働きを指すのであり、元来の意味においてどこに焦点が置かれるかということに関しては、その使用者、すなわち話し手と聞き手において明確であるという制限下において自由である。焦点の転移とは、元来の意味が示すものごとのある要素に注目し、その注目する要素を違えることによって、同一の概念を別の視点から捉えて、新しい意味とすることを指している。語によって、ある特定の要素に焦点が置

かれていると一般に解されるものもあるが、意味の発生に関わる限り、焦点が置かれる要素は、そのような通念上の解釈からは離れたところで選択されるのである。

そして、移動の概念構造内の変化ではないが、(12)の *rennen* の残りの変化に関しては、i 中の転用は移動と状態変化の対応、i の転用的使用から ii の変化に関しては、結果が共通していることによる、状態変化から動作へのメタファー化として、これまでと同様に説明できる。この(12)の後半の変化を除いて、(10)から(12)に示したような同一の「移動」という概念構造内での変化の例は、上述のように、メトニミー化及び焦点の転移によって説明されるが、例外的に、次の(13)のような例も見られる。

(13) *spazieren*

19 世紀まで「のんびり歩く」（後に *spazieren gehen* 「散歩をする」として使用）
→転用 「目的もなしに、あちこちへぶらぶらする」

(13)の *spazieren* の例の場合は、移動の概念構造内の変化であるにも関わらず、(1)から(12)の例に見られたような、主体や対象物に関する変化はなく、「のんびり歩く」から「あちこちへぶらぶらする」という意味への変化において、焦点の働きは見られない。この例に現れているのは、その様態に関する変化、すなわち「目的なしに」という意味の付加のみである。この点に関しては、「散歩をする」という使用から「目的地を定めない」というメトニミー化による変化として説明される一方、そこに焦点の働きは存在しない。つまり、この変化は、2 章の終りに述べた通り、メトニミー化による変化ではあるが、焦点の転移が共起していない例であり、焦点の転移がメトニミー化の基盤となっているのではなく、あくまで外的な状況や場、あるいは既知の情報に基づいた通念上の解釈から意味が導き出されていることの表れである。(10)から(12)のいずれのメトニミー化の例についても、焦点の転移とメトニミー化の働きが、それぞれ別々に意味の発生に関わっていることは明らかである。ただし、(10)や(12)の例に見られたように、それぞれの働きが共起することによって、一つの意味を導き出しているものであり、完全に個別の意味変化のメカニズムとして捉えられるものではない。メトニミー化という意味発生のメカニズムと焦点の転移という認知的活動は、あくまでメトニミー化という外的な変化のメカニズムが、焦点の転移という原動力によって内的な側面から支えられているという関係にある。

3.2. 移動の概念から活動の概念への変化

移動の概念から、その他の活動の概念へと変化する例が、メタファー化によって説明されることは、これまでに挙げた例でも説明したとおりである。

(14) *humpeln* 元来の意味：「鈍臭く歩く、足をひきずって歩く」（DWb¹³; Paul: 488）

転用：「ぞんざいな仕事をする、出来の悪い仕事をする」（Schottel¹⁴; Paul: 488）

(15) *bummeln*

i. 「あちこちへよろめく」（1716, Trübners Deutsches Wörterbuch¹⁵; Paul: 195）

ii-i. 「無駄にぶらぶら歩く」

ii-ii. 「怠ける」 (1855, Trü. ¹⁶; Paul: 195)

ii-iii. 「ぐずぐずする、いい加減に仕事に従事する」 (Nietsche¹⁷; Paul: 195)

(14)の *humpeln* の例においては、元来の意味「鈍臭く歩く、足をひきずって歩く」という意味において、その移動の様態に焦点が当てられる一方、「ぞんざいな仕事をする」という動作についても、その様態に焦点が当てられる。「歩き方が不格好であり、上手ではない」という移動の様態と、「仕事の仕方が上手ではない」という動作の様態とが類似していることから、その様態という共通した要素について、移動と活動という2つの概念領域が結び付いて、メタファー化が起こり、「ぞんざいな仕事をする」という意味が新たに現れると説明される。また、(15)の *bummeln* の例では、i から ii-i の意味への変化における「無駄な」という意味の付加はこれまで通りメトニミー化によって説明され、そこから ii-ii「怠ける」、ii-iii「ぐずぐずする」といった、動作の様態に焦点が置かれた意味が現れている。これらも、(14)と同様、元来の意味の「機敏性がなく、目的も持たずに歩いている」という様態からのメタファー化によって現れた意味であると説明される。これらの例のように、移動の概念を全く持たないような動作が新しい意味として現れている例の場合には、焦点の共通性に基づいたメタファー化というメカニズムによって、意味が新たに発生するものである、ということが容易に説明できる。しかし、次のような例ではどのように説明されるのであろうか。

(16) *rollen*

i. 「(球、石、涙などが) 転がる」

ii-i. 「巻く、丸める」

ii-ii. 「転がす」

ii-iii. 「(洗濯物の) しわをローラーで伸ばす」

(16)の *rollen* の例の場合、i の意味「転がる」はまさに移動様態動詞であり、本来その様態に焦点が当てられていると考えられる動詞である。概念の面から捉えるならば、ii-i の「巻く、丸める」という動作及び ii-ii の「転がす」という動作は活動の概念に属するはずのものである。しかしここで矛盾が起こる。例えば(12)の *rennen* の例なら、「追いやる」という意味から「走る」の意味への変化について、いずれも「移動」の概念で捉え、対象物から主体への焦点の転移とメトニミー化によって、その新しい意味が導かれるものであるとした。この考えに立てば、ii-ii の「巻く、丸める」という動作、ii-iii の「転がす」という動作も、同様に「移動」の概念で捉えることで、それぞれの意味の発生は、対象物-主体間の焦点の転移によるものとして捉え得る。その一方で、上述したように、「活動」の概念で捉えれば、その様態の共通性によって、「移動」の概念から「活動」の概念へのメタファー化として説明されることになる。

この矛盾の根本にあるのは、「活動」という概念の広さである。これはすなわち、「移動」という概念が、「活動」という概念の下位概念として見做され得るということに起因する、

ということである。移動様態動詞について、移動の意味が強くなったり弱くなったりするように、共時的観点から移動の意味の際立ちによって説明するだけなら、吉田 (2001) にあるように、活動と移動の概念を対立的に捉えることでその説明に足るものとなるであろうが、意味の発生の基盤としての概念領域を考える上では、あまりに抽象的な上位の概念領域で捉えるだけでは不十分である。意味の発生において、概念領域が転移しているか否かということを確認するために必要なのは、その意味が一般にどのような概念領域に属しているかということ捉えるのではなく、意味の発生に関わる段階で、その意味が示す物事を、使用者がどのような概念領域で捉えたか、ということである。(14)や(15)のように、新しく発生した意味において、移動性が全く示されないような意味への変化の場合には、「人の動作」よりさらに抽象的な「活動」という概念で捉えても、それを「移動」という概念と同レベルで見ることができるために、このような問題は起こらない。しかし、(16)の *rollen* のように、新しい意味にもその移動性を残していると考えられるような場合には、同じく「移動」の概念構造で捉えることができるため、新しい意味を「活動」の概念で捉えるか、「移動」の概念で捉えるかという違いによって、メトニミー化とメタファー化といういずれのメカニズムによっても説明が可能となってしまう。「状態」や「状態変化」に対応する、「活動」といういわばアスペクト的視点に基づく抽象的な概念領域と、その下位概念として捉え得る、一つの動作としての「移動」というより具体的な概念領域という、具体性のレベルが異なった概念領域を、同レベルに並べて論じていることによって、このような矛盾が生まれているのである。ということは、意味の発生のメカニズムに関わる概念領域の捉え方として、「移動」という概念領域に対しては、それと同レベルの具体性を持った、「活動」よりもさらに下位の概念領域で捉えるべきであろう。しかしながら、「活動」の概念下にある全ての動作について、主体であれ対象物であれ、そこに動きが伴う以上、主体あるいは対象物の一部あるいは全部の存在する空間的位置は変化している、すなわち移動性が伴われる。(16) *rollen* の ii-i 「巻く、丸める」という動作について、いくら対象物に移動性があるために「移動」の概念で捉えることが可能であるとしても、(12) *rennen* の「追いやる」という動作ほどの移動性が示されるわけではない。これはひとえに、その動作の主体が移動性を有するかどうかということに関係している。(12) *rennen* の場合には、「追いやる」という意味が「活動」の概念として見做されると同時に、その対象物と同等の移動性が主体にも認められるために、同じく「移動」の概念構造内で捉えることが可能なのである。(16) *rollen* の「巻く、丸める」の場合には、必ずしも主体の移動性は必要とされず、むしろ「活動」の概念、あるいはさらに下位の具体的な概念で捉えられる方がより自然であると考えられる。従って、この変化については、やはりメタファー化による変化であるという結論に至る。その一方で、ii-ii において現れる「転がす」という意味は、(12) *rennen* の例と同様、「移動」の概念構造内において、主体一対象物間の焦点の転移が起こっている例であると考えられる。ただし、この焦点の転移については、メトニミー化を伴うものではなく、同一の「移動」の概念というより、動作そのものが同じであるため、新たな意味の発生として捉えられるものではない。けれども、根本的な認知活動としての焦点の働きから説明できる事例として、あえてここに示しておく。

3.3. 活動の概念から移動の概念への変化

活動の概念と移動の概念の関係について、移動という概念の具体性のレベルに合わせて、活動の概念もより具体的な下位概念において捉えるべきであることは先に述べたが、ここで採り上げるような活動の概念から移動の概念への変化の場合、その問題はさらに顕著に現れる。

(17) rasen

- i. 「荒れ狂う、暴れる」
- ii. 「荒々しく、急いで前進する」 (Goethe, Briefe 19.6.22¹⁸; Paul: 780)

例えば、(17)のような例の場合には、「活動」と「移動」という概念で捉えると、iの「荒れ狂う、暴れる」という動作の様態と、iiの「荒々しく、急いで前進する」という移動の様態は、完全に共通しており、場所や方向を示す表現を伴うことによって、移動の概念において捉えられると説明される。

(18) schlürfen

- i. 「音を立ててすする」¹⁹
- ii. 「引きずった足取りでのろのろと歩く」

daß man mich zur Stubentür hinaus schlurffen hörete (Grimmelsch.²⁰; Paul: 857)

一方、(18)の schlürfen の例では、その動作が発生させる「引きずるような音」について共通しており、「活動」と「移動」という概念の間のメタファー化による変化として、(17)と同様の例であると説明することは可能であるが、その実、「活動」の概念に関して異なった側面を有する。(17)の rasen の例は、同一の動作において、活動を示す意味から、その移動性が強く現れた意味になるという、吉田(2001)において記述されている活動性と移動性の意味の際立ちにおいて説明されるべきものである。それに対し、(18)の場合、動作自体は全く別の動作であり、同一の動作における単純な移動の意味の際立ちと同じ説明が成立するとは考えられない。このような混乱も、「活動」という概念の広さに起因しているものである。また、(18)のように、動作の発生させる音を共通点として、移動の意味を有するようになった動詞は他にもいくつか見られる。これらを、活動の概念よりもさらに下位の概念、つまり、より具体的な概念領域において、例えば音放出動詞という語場において捉えることによって、意味発生の一つのパターンと見做すことができる。このことから考えても、活動という概念が、意味の発生に関わる概念領域として扱うには、広すぎる概念であると言えよう。

やはり「活動」と「移動」という概念を対立的に捉えるのは、同一の動作における活動性と移動性の際立ちにおいて考えられるべきことであり、意味の発生に関して、様々な動作を「活動」という一つの概念にまとめた上で、「移動」の概念と区分して捉えようとするには無理がある。それは無論、いくつかの事例に出てきた、活動の概念から活動の概念への

変化について、最も言えることであろう。全ての動作を「活動」の概念で捉えてしまうのであれば、ある動作から別の動作への意味変化について、メタファー化は存在し得ないことになるからである。移動様態動詞に関して、メトニミー化に必ずしも焦点の転移が機能するわけではないという問題については、2章で示したように、元来の意味が「移動」の概念を有しているかいないかということが関係しているのではなく、「活動性」と「移動性」の際立ちで捉えることができるか、あるいは「活動」の下位にある別の概念と「移動」の概念の関係で捉えるべきであるか、ということを混同していたことにその要因がある。先に述べたように、メトニミー化は外的な力を受けて働く受動的なメカニズムとして、焦点の転移は、根本的活動として、内的にメトニミー化を支える働きとして新たな意味を発生させるものである。ゆえに、これらは別次元で考えられるべきものであり、焦点の共通が原動力となるメタファー化とは異なったものとして捉えられるのである。

3.4. 全体の傾向

あえて「活動」と「移動」という一対の概念領域にまとめて、移動様態動詞の変化の事例を見た場合、総じて「活動」から「移動」への変化の方が、「移動」から「活動」への変化よりも多く見受けられる。また、「移動」から「活動」への変化では、その様態に注目した、修辭的、比喩的表現における使用が多く見られる。「活動」から「移動」への変化が多く見られるという傾向は、先に述べたように、全ての動作について移動性が共起し得るものであり、様々な動作に「移動」の概念を結び付けることが、「移動」の概念に様々な動作を結び付けることよりも容易であることに由来すると考えられる。また、いずれの変化についても、焦点が当てられる要素として最も多いのがその「活動」あるいは「移動」の様態である。これは、名詞についての概念化の際、焦点が当てられる要素として、視覚的情報が優先されるのと同様に、やはり動詞についても、視覚的に捉え得るその「活動」の様態や「移動」の様態が、心的情報や意味役割よりも優先されていることが考えられる。

4. おわりに

分析の基本とした意味の発生モデルについては、その根拠となる事例の分析を更に進め、改良を加える必要がある。そして、移動様態動詞の分析についても、「活動」と「移動」という2つの概念で対立的に分類して考察することは、上述のとおり、「活動」という概念の広さゆえ、分析に先立ってさらに具体的な、いわゆる「移動」と同等の具体性を有する概念領域を設定しておく必要がある。しかし、このように意味の発生の傾向を明らかにする手掛かりとしては、概念領域の設定が一定の自由性のもとに行われるとする以上、焦点の働きとメタファー化・メトニミー化というメカニズムを軸として意味変化を考察するという点において、一つの基準となり得るものであることは確かである。従来とは異なった一記述方法として意味の発生モデルをここに示し、その基盤となる根本的認知活動を考慮に入れて、意味変化現象を捉えることの必要性を示唆するものである。

注

1. Heine (2003: 575)
2. Sweetser (1990)では、次のように説明されている。
 "...we model our understanding of the social and physical world; and simultaneously, we model linguistic expression itself not only (a) as description (a model of the world), but also (b) as action (an act in the world being described), and even (c) as an epistemic or logical entity (a premise or a conclusion in our world of reasoning)."
 (Sweetser 1990: 21)
 また、Langacker (1987)では、空間・時間・義務・条件などのような`primitive representational field`として`domain`を扱っている。
3. 本稿では、「新しい概念領域で本来の概念領域を捉え直す」認知的活動のことを、「概念領域の転移」と呼ぶ。これは、Heine や Traugott らが、この働きを`Conceptual Shift`と呼んでいることに由来する。
4. Traugott and Dasher (2002: 28)
5. 本稿において用例は全て Paul の Deutsches Wörterbuch によるものである。これは、分析において、用例そのものより、Paul の行った通時的かつ客観的記述自体を分析対象とし、その観点を統一するためである。
6. Paul の記述には、「Christoph Martin Wieland が初めて使用」とある。
7. stapfen: mhd. Gewöhnlich von einer langsamen Gangart des Pferdes, dann außer Gebrauch gekommen, durch Wi.(Wieland) neu belebt, nur von Menschen `schwerfällig einherschreiten'. (Paul: 955)
8. Matthias Kramer: Das herrlich-große Teutsch-Italiänische Dictionarium Oder Wort- und Red-Arten-Schatz. 2 Bde. Nürnberg 1700-1702, Ndr. Hildesheim, Zülich, New York.1982.
9. Johann Christoph Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen. 4 Bde. Leipzig 1793-1801, Ndr. Hildesheim, New York 1970.
10. Matthias Kramer: Das herrlich-große Teutsch-Italiänische Dictionarium Oder Wort- und Red-Arten-Schatz. 2 Bde. Nürnberg 1700-1702, Ndr. Hildesheim, Zülich, New York 1982.
11. Paul の記述では、i の転用的使用「ひどい状況になる」から来していると記述されている。
12. Friedrich Schiller: Schillers Werke. Nationalausgabe. Weimar 1943ff.
13. Deutsches Wörterbuch von Jakob Grimm und Wilhelm Grimm. 16 Bde. in 32 Teilbdn. Leipzig 1854-1960. Bd. 33. Quellenverzeichnis. Leipzig 1971.
14. Justus Georg Schottelius: Ausführliche Arbeit von der Teutschen HauptSprache. Braunschweig 1663. Ndr. 2 Bde. Tübingen 1967.
15. Trübners Deutsches Wörterbuch. Im Auftrag der Arbeitsgemeinschaft für deutsche Wortforschung hrsg. v. Alfred Götze, weitergeführt von Walther Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939-1957.

16. Trübners Deutsches Wörterbuch. Im Auftrag der Arbeitsgemeinschaft für deutsche Wortforschung hrsg. v. Alfred Götze, weitergeführt von Walther Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939-1957.
17. Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden. Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. München, Berlin, New York 1980.
18. Goethe の作品集等はいくつか挙げられているが、この例についてどこから引用しているかまでは記述されていない。
19. 液体を吸い込むという音の性質から、ウムラウトした。(Paul: 857)
20. Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen: Der Abentheuerliche Simplicissimus Teutsch und Continuation des abentheuerlichen Simplicissimi. Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Hrsg. v. Rolf Tarot. Tübingen 1967.

参考文献

- Fritz, Gerd. 1974. *Bedeutungswandel im Deutschen: Neuere Methoden der diachronen Semantik*. München: Max Niemeyer Verlag.
- Gerling, Martin, und Norbert Orthen. 1979. *Deutsche Zustands- und Bewegungsverben*. Bd.11. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Heine, Bernd. 1993. *Auxiliaries: Cognitive Force and Grammaticalization*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd. 1997. *Cognitive Foundations of Grammar*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd. 2003a. Grammaticalization. In Brian D. Joseph and Richard D. Janda (eds.), *The Handbook of Historical Linguistics*, 575-601. Massachusetts: Blackwell Publishing.
- Heine, Bernd. 2003b. *Grammatikalisierung im Deutschen — Ein Theoretischer Rahmen*. 日本独文学会第 31 回言語学ゼミナール講演要旨.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Hock, Hans Henrich. 1991. *Principles of Historical Linguistics*. (2nd edition). Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago/London: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume I: Theoretical Prerequisites*. California: Stanford University Press.
- Nerlich, Brigitte, and David D. Clarke. 1992a. Outline of a Model of Language Change. In Günter Kaufmann and Michael D. Morrissey (eds.), *Diachrony within Synchrony: Language History and Cognition*, 125-142. Frankfurt am Main/Berlin/Bern/New York/Paris/Wien: Peter Lang.

- Nerlich, Brigitte, and David D. Clarke. 1992b. Semantic Change: Case Studies Based on Traditional and Cognitive Semantics. *Journal of Literary Semantics* XXI(1): 204-225. Heidelberg: Julius Groos.
- Nerlich, Brigitte, and David D. Clark. 1999. Synechdoche as a Cognitive and Communicative Strategy. In Andreas Blank and Peter Koch (eds.), *Historical Semantics and Cognition*, 197-214. New York: Mouton de Gruyter.
- Paul, Hermann. 1898. *Prinzipien der Sprachgeschichte*. (3rd edition) Auflage, Tübingen: Max Niemeyer Verlag. [福本喜之助(訳) 1965. 『言語史原理』 東京: 講談社.]
- Sperber, Hans. 1923. *Einführung in die Bedeutungslehre*. Bonn/Leipzig: Kurt Schroeder.
- Sweetser, Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs, and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 伊藤 眞. 2003. 「慣用語法対照研究とコミュニケーション」, 柿沼義孝(編) 『レトリックと慣用語法対照研究の諸問題 —ドイツ語教育の観点から—』1-18. 日本独文学会研究叢書 21.
- 荻野蔵平・齋藤治之(編著) 2005. 『ドイツ語史小辞典』 東京: 同学社.
- 辻 幸夫. 2002. 『認知言語学キーワード辞典』 東京: 研究社.
- 辻 幸夫. 2003. 『認知言語学への招待』 東京: 大修館書店.
- 西本美彦他 (訳) 2004. 『ヴィルヘルム・シュミット著 総論ドイツ語の歴史』 東京: 朝日出版社.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 吉田光演・保坂靖人・岡本順治・野村泰幸・小川暁夫 (共著) 2001. 『現代ドイツ言語学入門 —生成・認知・類型のアプローチから—』 東京: 大修館書店.

考察対象とした辞書

- Paul, Hermann. 2002. *Deutsches Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes* (10th edition). überarbeitete und erweiterte Auflage von Helmut Henne, Heidrun Kämper und Georg Objartel. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.